

長門宮御製  
集

しまねとしおぜんあつたに かん  
島尾敏雄全集 第11巻

一九八一年九月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二二

電話東京二三五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六一七九九

堀内印刷・美行製本

© 1981 Toshio Shimao

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〔検印廃止〕落丁・乱丁本はお取替えます

島  
尾  
敏  
雄  
全  
集

第 11 卷



島尾敏雄全集第Ⅱ卷・目次

記夢志	5
* 夢日記	III

ブックデザイン  
平野甲賀

記夢志





昭和二十四年

四月十七日

年下の友人Sとの旅

遊興地の旅館 泥酔

翌日次の地点へ移る

僕は単独でわき道をしようとする 落合ふ場所を決めた

雨あがりの夕方 海端の温泉町に着く

暗い

右の坂道で女の子に逢ふ

ヤミの中で呼びとめる

右側に行った理由

右側に行く

X地点での人影

二階建の宿屋

電車道

雨にぬれて光ってゐるターミナルのわびしさ 電車を待つ人 電車中々来ない（バスがあるのではないか）

もう早くSとの約束の場所に行きたい——S、別府

雨戸をしめてゐる宿や 電灯のくらい町

小さな町 それ丈の町

電車途中迄 戦後地図にのつてゐない線路は、途中の鉄橋が崩壊 バスなら行くが 夜は出ないでせう

早く宿を定めなければならぬ（午後八時）

左の坂の方を引返して来る

X地点で二人の引手婆と一少女

朝鮮うどんを食べて行かないか、この娘と遊んで行っておくれ

鉄柵のついた急な石段を下りる、娘と一緒に 朝鮮風な家、朝鮮名前

朝鮮風な部ヤ（あみ物）

エトランゼへの或る感情

僕の本心

女を抱擁 くすぐって笑はせる 擬態 多少の欲情、然し中絶しさうな一寸待って

兄貴と称する者がはいつて来る 戦斗帽、ふやけふくらんだ顔  
馬鹿いんぎん、その客

朝鮮料理が運びこまれる

それをしほに立去らうとする

まだ宿はきまつてゐないのであった

昭和三十四年

七月二十六日

映画の見物

それを割引してもらいたい

映画館主（不法者）に誰が交渉するか

彼は不在だ

彼の寝室が見えている　八畳の間にふとんが二つ敷いてある

妹娘に交渉　もちろん話は通じない（平一雄校長の声）

姉娘に交渉　しかし彼女は延髄麻痺

淵の上に建てられた家

淵の水を部屋のですりから眺めている

登山路のような公道　広告板にはられた観光ポスター　旅への誘い

おどろおどろした日暮時

ざるそば屋でこちらをしきりにうかがう青年

仲居がいるようないないような

やっぱりあなたでしたかと言うが思い出せずにほどほどに相槌をうつ  
多分精神病院の中で会ったのだろう

何気なく外に一緒に出る

是非よってくれという 誰かがついてくるようでもある

一軒の家にはいる

部屋部屋に人が一ぱいいる おしわけては行って行く

彼の部屋は二人だけ 相宿は不在

相手をたしかめるために名刺を出す

彼の机の上にぼくの著書 小説本あり 彼の現在の仕事（あいまい）

秘密結社？

彼も名のつたように思う ききとれぬ 思い出せぬ

航空等の本 はっきり思い出す、軍隊のときの知り合い

奇妙な宗教団体の一行来て彼に洗礼（？）を授ける

彼の名前どうしても分らない

カフタンのようなものをきている自分、十字架を首に下げて

外は打撃的な雨

伸三が先に出て悲鳴をあげる 出て行くべきかどうか  
やっと帰る 倉庫のような家 二階でミホが待っている  
ぼくが帰ったのに外の人<sup>ほか</sup>を待っている

八月二十二日

Lodging for the night

アンチオーダークリームのにおい

二人のアメリカ人（坊主頭のアメリカ人）

集会（？）が終る

沢山のバスやタクシー（夜中おそい）

そのあとで一つの部屋——

県商の時の連中 それに三島、庄野、吉行、安岡、遠藤ら

何々新聞のシマオ先生の愛の復活は苦勞（？）したね

そのの反発——回心へのヤユ

連中、出かけてしまう

残る 多田礎らが入ってくる

追い出そうとするがはいってくる

ホテルの作法も知らぬということ 朝食の方法 スノブ

一人、別の部屋に

ドアがしまらぬ カーテンがちぎれている 又、はいってくる

しめようとしていると ベールで顔を包んでいる マヤのような

救けたモーターバスの女車掌

隣室のベッドあいている

一人だと思つて行くと、一ぱい 来タ来タ——ササヤキ

貧乏人の母と赤ん坊

ガンコで黒いイナカのヨッパライ

ムットシタ空気

アケ方

思イキッテ外ニ

原が何カ云ウ ソレニ皮肉ナ返事 誰彼に皮肉な返事

どこかに行こうとする

十月七日

泉豊光さんがミサのとき信者に福音書をよませた みんな呼びすてにし ぼくのとき——さん付にした 一字だけへんな字があつてよめない ルカ神父がのみこみ顔に笑っているので「このあたりまでは読んでいないことを証明しました」とぼくは言う

十月八日

バスに乗って温泉場(?)のような所に行くときと終点にルカ神父がジープをとめて待っている(ぼくはそこにルカ神父がいることは考えていなかった)

十月九日

隣五郎兄の夢 ミホと三人のとき カンバイについて話している

あわて者は神梅などと字を当てるだろうと兄が言う

ぼくが先走って神南風じゃないですかというとき、黙っている

ミホに説明しはじめるのをきくと神南風ではなく灌漑のようでもあるがよく分らない

十月十日



白い雲にのった赤い飛行機がとんできた

それは危険な兵器、薬品を搭載している

マヤがひとりで風呂に行った　心配だったがそのままにした　果して飛行機は着陸してきた　アメ

リカ人がおりてきた　薬品を撒布　吸うとがいこつになってしまう　然し吸わずにおれない

粘土をはなにあてていきをすると中和する　マヤが湯船でひとり泳いでいる　粘土をあてがう

はだかのまま負ぶって帰宅　ミホと伸三に粘土をあてがう　他の人には教えたくない